

論文の和文要旨

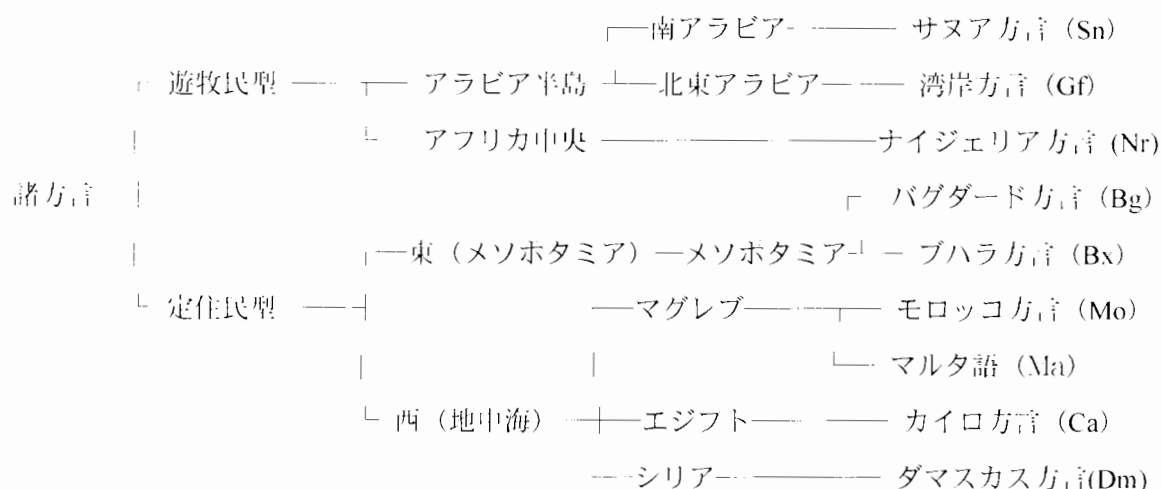
論文題目	アラビア語方言における歴史音韻論的ないくつかの問題
氏名	長渡 陽一

本論文の目的

本論文の目的は、アラビア語の口語諸方言の間で音韻規則対応していない、つまり各方言において歴史的に不規則に変化したと見える音韻変化について説明することである。とくに、動詞の語根子音はよく対応しているのに、動詞語幹母音が対応していないものが多いこと（4章）と、語彙化や文法化に伴って短縮した語形とその原形との違い（5章）を取り上げる。また、これを通してアラビア語方言の歴史について何らかのデータを提供する。

本論文で比較するアラビア語方言

アラビア語は、地域的には、アラビア半島、マグレブ（北アフリカ）、エジプト、中央アフリカ、シリア、メソポタミアに大きく分けることができる。また、アラビア語の方言は、このような地域的な区分と同時に、遊牧民方言と定住民方言がある。遊牧民方言も定住民方言も上の地域区分を越えて共通の特徴をもっている。本論文では、地域的な区分からそれぞれ代表的な方言を取り上げた。アラビア半島はさらに3つに分けられるが、そこから2つを選んだ。また、周縁方言は、ナイジェリア方言、ブハラ方言、マルタ語を対象とした。次表の最右の方言を取り上げた。



子音の対応 (2章)

2章では子音の対応、規則的变化を概観する。古典語における *D* (文字名ダード、[d]であった) に対応する音が遊牧民型方言も定住民型方言も *ð* に合流していることから、遊牧民型と定住民型の共通の口語祖語が古典アラビア語とは別にあったと確認した。また、歯間音 *θ*、*ð*、*ð* かどのように反映しているかによって、定住民方言をさらに地中海沿岸の西定住民型とメソポタミアの東定住民型に分けた。東定住民の諸方言の祖形には歯間音があったが、西定住民の諸方言の祖形は、すでに歯茎閉鎖音に合流していたのではないかと提案する。

母音の対応 (3章)

3章では母音の対応、規則变化を概観する。口語祖語の母音体系は *a*、*i*、*u* の3母音体系であり、口語諸方言も基本的にはこの体系を引き継いでいる。また、モロッコ方言などマグレブでは *a* と *i* が *ə* に合流し、ダマスカス方言などシリアでは *i* と *u* にアクセントが置かれると *ə* に中和する。この他に、バグダード方言では開音節の *a* が *i* ないし *u* に交替した。音声的に「傾き」(アラビア語でイマーラ) によって *a* が *e* や *i* になる現象は多くの方言で認められる。マルタ語では *a* が傾斜した *e* が音素化した。諸方言の子音や母音の違いの大部分は以上のような規則的な変化で説明ができるが、これでは説明ができないのが、動詞語幹母音の不一致と、語彙化や文法化に伴って短縮した単語である。

動詞語幹母音のシフト (4章)

アラビア語の動詞は、語根子音と型を分析できる。動詞の型の最も基本的な (CVCVC' 型 (第 1 型) では、それぞれの動詞で、過去語幹、現在語幹に *a*, *i*, *u* のどれかが決まっている。この語幹母音が諸方言の間で一致していたり、一致していなかったりと、母音規則変化に見られるような対応をしていない。この問題が、音韻対応しない語形の一つ目である。

動詞語幹母音はこれまで、古典アラビア語と個別の方言との異同という観点から研究されている (Cohen 1970; Abboud 1976; Holes 1995)。本論文はアラビア語動詞語幹母音を、アラビア語諸方言の全体から見た初めての研究である。観察の方法は、複数の方言の動詞語幹母音の分布をみるために、まず、それぞれの動詞の語幹母音において、どの母音が多くの方で一致しているかを一覧した。多くの方で一致している母音と異なる場合に、何らかの原因でシフトしたと捉えた。すなわち、多くの方で一致しているものを、作業仮説として口語祖語に設定し、そこから各方言への歴史的なシフトとして説明することができた。

この方法によって、諸方言の共通した傾向を見ることができた。また、古典アラビア語とは別の口語祖語があった可能性を示した。例えば、**D-r-h* 'to hit' の現在語幹母音は古典アラビア語が *I* であるのに対し 8 方言の内 7 方言で *U* である。これは、口語祖語が古典アラビア語とは別のものであることを示す。各地で発生したアラビア語のピジン、クレオールが後に古典語によって引き戻された結果、現代諸方言になったとする (Versteegh 1984) ならば、**D-r-h* の現在語幹母音は古典と同じ *I* で共通していなければならないのである。こうして Ferguson (1959) の提案したコイナーアラビア語を支持することになった。

単語短縮における音韻変化 (5 章)

諸方言にあるいくつかの単語や助動詞などのいくつかは、その語源が明らかであるが、語源の単語と規則的に音韻対応しておらず、この変化過程についてはこれまで統一的な説明がされていない。

語彙化としては 'now' を表す単語と疑問詞を取り上げた。定冠詞と 'time' を表す単語との連結によって例えばダマスカス方言では **hal-waʔt* > *hallaʔ* のように短縮している。これらの単語短縮では (CVCVC) に向かって音韻変化が起こっていることが明らかになった。また、方言によってさまざまである疑問詞の語形も、この方向性によって短縮している。

文法化としては、動詞が変形した助動詞を取り上げた。ダマスカス方言の *ra:viħ* 'going' が *rah*、そして *ha* 'will' になるなど、大きく音韻が変化する。これも語彙化と同じように語根や型を維持する必要がなくなる。そして、文法化の場合は単語から接語、接辞へと用法が移っていくにしたがって、CvC、Cv という音節構造に向かって音韻変化していることが明らかになった。また、語彙化、文法化に伴う単語短縮のこの方向性は諸方言を超えて同じである。

結論

以上、音韻的に規則対応しない語形に対して説明を試みた。

アラビア語の動詞や名詞などの語彙項目は、その弁別を主に担っているのが語根子音や「型」である。このため子音は、音韻体系の変化による交替はあるが、脱落などの大きな変化は語彙項目においてあまり見られない。4章でみた動詞も、語根や型はどの方言でもほぼ保たれている。しかし、母音は各方言で交替させることが可能である。そこで、語幹母音を類推によってシフトさせて文法的に利用したり、語根の特徴に合わせる方言や、全てを中和させて利用しなくなる方言も生じた。

語彙化や文法化による単語短縮では、語根や型が組み替えられ、ある一定の音節構造へ向かうために音韻変化が起こる。もはや語根や型が維持されなくなり、子音も変化するようになる。さらに音韻の交替だけでなく脱落や融合なども起きる。

語彙化は複数の単語や形態素が連結するため、一単語が長くなる。この語形を短くして「型」に合わせ、また、語根子音を3つに再編成する過程で、子音の脱落や同化がなされるのである。(Dm) *halwaʔt* (定冠詞 + 'time') が *hallaʔ* 'now' に、(Sn) *dal-hi:n* (定冠詞 + 'time') が *dahhi:ni* 'now' の3子音になっている。文法化は語根子音が崩され、CvC、Cv の音節構造に向かうために音韻変化が起こる。語彙化や文法化による単語短縮の音韻変化を歴史音韻論の中でみていくことを提案したい。